

同輩からの認知可能性が大学生のリスクテイキングの与える影響

平田 航基

同性同年齢の若者(同輩)の存在を認知した思春期の若者は、リスクテイキングの頻度が増加する。この同輩の影響は peer effect とよばれ、同輩の存在がリスクな選択に潜在する即時の報酬への感受性が高めることによるものとされている。本研究では、同輩の存在を必ず認知させていた先行研究では希薄であった、同輩から認知されるかもしれないという「可能性」の観点から実験的な検討を行った。特に、認知する同輩のパーソナリティに焦点を当てて実験を行った。

実験 1 では即時に得られる少額の一定期間後に得られる高額な報酬のどちらが好ましいか選択する遅延価値割引課題を質問紙にて行った。自身の実験の結果を同輩に開示される「認知条件」、開示されるかもしれない「認知可能性条件」、結果が開示されない「単独条件」を設けるとともに、想定した同輩がリスク志向的か否かを想定させることで、同輩認知の可能性と合わせて検討した。その結果、同輩認知の可能性および想定する同輩のパーソナリティに関わらず、即時報酬に対する好ましさに差があるとはいえないことが示された。一方で、実験中に同輩の存在をどの程度意識したか尋ねた結果、認知可能性条件の参加者は単独条件の参加者よりも同輩の存在を意識する傾向にあることが分かった。ただし、実験 1 は集団実験であり、質問紙への回答を行う際に別の参加者が同輩として存在する状況であったため、「単独条件」においても peer effect が生じていた可能性があった。

実験 2 では、上記の問題を踏まえて、個別にギャンブル課題を行い、同輩認知の可能性と peer effect との関係を追試した。また、実験 1 では参加者各自に想定する同輩のパーソナリティを評価させていたが、実験 2 では自分を認知する同輩のパーソナリティを教示によって操作し、「リスク志向的」「リスク回避的」「教示なし」の 3 水準を参加者間要因として設定した。

結果として、同輩を認知するかもしれないという認知可能性条件において、その同輩がリスク志向的なとき、リスク回避的あるいは同輩のパーソナリティについて教示を行わなかったときよりも、リスクテイキングの頻度は高まった。さらに、認知する同輩がリスク志向的である場合、同輩に認知されるかもしれないとされた参加者の方が、認知されるあるいは認知されないとされた参加者よりも、リスクテイキングの頻度が高まることが示された。

本研究から同輩に認知されるかもしれないという可能性のレベルでも peer effect は発生することが示された。また peer effect が発生するためには同輩をリスク志向的だと若者が判断していることが必要であることが示された。同輩に認知される条件で peer effect が発生しなかった点、および同輩のパーソナリティについて教示しなかったときに peer effect が発生しなかった点は先行研究と異なり、今後の検証の余地がある。同輩に見られるかもしれないという条件で peer effect が発生したことは、大学など若者が遍在する場や SNS において、常にリスクテイキングの頻度が増している可能性が導ける。(安全行動学)